

初代八戸藩主南部直房夫人靈松院の周辺

佐々木 勝宏

岩手県立博物館, 020-0102 盛岡市上田字松屋敷 34. Iwate Prefectural Museum, Morioka 020-0102, Japan.

1 はじめに

八戸藩初代藩主南部直房夫人で二代藩主南部直政生母靈松院の生涯について岩手県立博物館研究報告第27号(2010年3月)で報告した。その後にかわった川口家の改易のこと、澤口観音堂本尊准胝観音坐像の胎内物のこと、『八戸嗣佐嘉志』にみえる直房と直政の虚空蔵信仰のこと、『延宝三年分限帳』にみえる成海与左衛門とその娘のこと、直政が奉納した蒔絵漆函入紺紙金泥妙法蓮華經八巻が二組存在することなどを紹介しておきたい。



写真1：岩手町川口明圓寺本堂

2 靈松院の実家川口家

八戸市立図書館蔵の八戸南部家文書のなかに「川口家文書」がある。明和6年(1769)に家督を相続した與九郎正備は、文化8年(1811)に自家の系譜書上を藩に提出している。それら各家のものを集成したのが『八戸藩士系譜書上』〔以下『書上』〕である。この提出にあたり正備とその子正常は、川口家の起源確認のため盛岡藩沼宮内代官所を経由で、岩手郡川口村の柏樹山明圓寺に問い合わせ、その回答などを参照して『川口家系』を書き残した。これにより、盛岡藩士川口家の改易と、靈松院が八戸藩主夫人となった幸運によって彼女が養育した甥が八戸藩士川口家の祖となったことがわかった。

『川口家系』〔以下『家系』〕は、藤原鎌足の子孫藤原秀郷の後胤で、相模国川村住人秀清が文治五年の奥州合戦に参加。恩賞として岩手郡に所領を得て住み着いたという前書に始まる。

秀利 秀清から十二代 與十郎 累代川口村古館に居住命により川村を川口に改姓 家紋丸違棒と百足之丸 日戸玉山下田沼久内浪民同族 応永年間(1394～1428)

南部守行配下で秋田出陣 領地境東藪川境、西北上川限、南玉山限、北芦田内 石高千八九百ほど

正義 秀利より九代 與十郎 南部信直の三戸入城に際して伏兵を倒すなど抽んでた忠勤により感状を得る 天正19年(1591)の九戸政実の乱出陣 慶長6年(1601)の和賀忠親の一揆出陣

正家 正義長男 初号秀影 源之丞 家紋丸違棒百足を切角之内左二巴水車に改める 南部信直に仕えて四百三十石を賜わる 岩手郡川口村に菩提所洞門柏樹山明圓寺開基 寺領高三十石と三具足と大鐘を寄進 正保2年(1645)7月22日死去 行年四十九歳 法号覚證院殿心空居士 墓郭は明圓寺山中 直房公御奥源之丞位牌御再造厨子記所「正保丙戌至元禄二己巳歳得四十歳為慈父斯位牌厨子靈松院再造焉安置于岩手郡川口村柏樹山明圓寺覚證院殿休安心空居士俗名川口源之丞藤原朝臣正家」信興公(八戸藩五代藩主)の宝暦年中(1751～1764)まで代々藩主は参勤の往復、明圓寺に立ち寄り焼香などしていたが、その後途絶える

正康 正家長男 與十郎 明暦3年(1657)年7月2日死去 行年三十四歳 梁巖棟公居士 月溪山南宗寺に改葬 嫡子正利が二歳で幼稚なため四百三十石を召上げ正利の成長後、相続を認める旨の書を下さる 女三人 直房公御奥靈松院殿 盛岡御家中内堀勘三郎妻(天倫院) 同千種右近妻(覚心院) 母は紫波氏娘耕雲院殿 年回仏事従 上被為執行 耕雲院部分付箋「御遠行年月共加可申家中 一統様付御沙汰書加可申」



写真2：新仙院墓石 写真3：天倫院墓石(新仙寺)

正利 正康長男 源之丞(利景) 御奥(俗名孝：靈松院)が養育 寛文5年(1665)8月5日に盛岡発、7日八

戸着 移住の際、召連同行者 漆沢某川村某根市某 漆沢某嫡子千太郎は後に立身仰せつけられる 寛文10年(1670) 正利十五歳で元服 下名久井村と玄米百石で二百石 家老秋田忠兵衛と中里弥次右衛門から小高帳 拝領 靈松院実家のため特別に鑓式筋 御刀無銘壺腰御 甲茶糸壺頭 御具足茶糸壺領拝領 延宝3年(1675) 上名久井村で百石 延宝9年(1681) 種市村五十石 剣吉村高瀬村各百石 元禄7年(1694) 種市村に五十石合 四百石を拝領 享保5年(1720) 5月20日死去 行年六十五歳 法号南窓紹薫居士 母は盛岡御家中高橋氏の 出 元禄12年(1699) 8月15日死去 歎窓喜公大姉

利雄 正利長男 與十郎 宝永3年(1706) 9月17日死去(『書上』は宝永2年) 行年四十一歳 法号涼岳浄天居士 弟十右衛門秀秋は紫波家相続 母中里弥次右衛門娘 宝永7年(1710) 5月18日に死去 鶴操妙龜大姉

利賢 利雄長男 與九郎 正利の家督を享保5年(1720) 6月25日 湊九郎兵衛宅で家督相続 母は名久井村某娘 宝暦5年(1755) 11月13日死去 延山貞寿大姉 享保15年(1730) 3月14日死去 義海良節居士 享年二十七歳

利秀 利賢長男 幸助 享保15年(1730) 4月19日家督相続 享保15年(1730) 11月25日大手門脇の居宅焼失 自火により累代相続の書記焼失 享保16年(1731) 10月28日死去 行年十一歳 即心全空信士 無嗣子のため四百石の小高帳を差出し保留 男與源次早世 女山縣右弥太妻離縁 母は及川惣八郎娘 享保15年(1730) 11月4日死去 雪庭了白大姉

正令 莊右衛門 及川惣八郎次男 享保16年(1731) 12月11日格別の家柄 家名相続 新地名久井村七十石 紋隅切角左二巴を隅入角左二巴に改める 宝暦6年(1756) 正月11日番頭 八十石加増合百五十石 宝暦6年(1756) 3月不始末で改易 天明4年(1784) 閏正月23日死去 七十一歳 勇巖宗威信士

正詠 正令養子 熊之進 紫波源之丞三男 宝暦6年(1756) 3月18日格別の家柄 金成五十石で召出 宝暦9年(1759) 4月朔日病身のため隠居 知行所名久井に蟄居 天明3年(1783) 9月26日出奔 女正詠妻 男式之丞早世 男式人女式人夭死 母浅山嘉右衛門娘 安永9年(1780) 3月13日死去 見岩妙性信女

正陽 正詠養子 代蔵 日沢新五右衛門三男 宝暦9年(1759) 4月朔日父正詠の家督相続 明和8年(1771) 9月7日死去 行年三十一歳 眞峯了空信士 母は正令娘 天明4年(1784) 2月19日死去 孤雲了室信女

正備 正陽養子 與九郎 及川友右衛門三男 明和6年(1769) 正月11日家督相続 二代続けて年若隠居のため首尾よく勤めよ 母佐々木新六娘正陽 死後再嫁

正常 正備長男源之丞 次男正武伴次西館家相続 男三人 女式人ともに夭死 母福田莊兵衛娘

領地の四境が示されている。川口城跡から眺望できる範囲だけでも領地の広さを感じる。南部旗下で何度も出陣している。菩提寺を開基出来る経済力を持っていたことが分かる。

正家が寄進した梵鐘は現存する。ただ三具足とあるが今残る花立と香炉には「元禄二己巳七月廿二日寄附焉」とある。従って、正家の寄進ではなく父の四十四回忌に際して位牌を修理した靈松院の寄進であり、誤っている。燭台は伝わらない。二代藩主直政は母方祖父が開基した明圓寺に寺領を寄進しようとしたが、八戸は遠く奉公できないと寺側が辞退して、参勤の往復に立ち寄って藩主が焼香するようになった。正家の娘は四人確認できる。もとは浅井長政や前田利家に仕え、信直に請われて南部家家臣となった内堀伊豆頼式の孫頼宗の妻と、藤堂高虎の旧臣千種成政の子成賢の妻と、重直の代に改易となった大釜政綱の妻と靈松院である。

『南部藩参考諸家系図』〔以下『系図』〕には大釜氏は彦右衛門政綱が若死にした時に、息子彦右衛門政抄が二歳あるいは四歳だったため継目を賜らずとある。叔母靈松院が八戸藩主夫人になったおかげで、漆沢に改姓し、八戸藩士となり命脈を保った。『書上』には富右衛門、弾治、茂左衛門の三家があり、初代のところには先祖は生国盛岡領漆沢。大釜彦惣の子などとある。岩泉義包の姉が大釜政綱の妻で政抄の母であったが、この岩泉義包は子沢山で、娘十七名のうち、七名の嫁ぎ先は八戸藩士と確認できる。中里嘉兵衛正吉、煙山主殿光邦、接待小右衛門宗治、駒木隼人広三、四戸清助宗朝、山口新助、中野門助正昆。その外は和井内三平光積、高橋与市、近内長右衛門為如、片岸用之助、荒谷宗宅、石峠右市、江繁喜左衛門、久慈中務治吉、熊谷善八、小軽米嘉兵衛の妻で、確認できないだけでまだ八戸藩士がいるかも知れない。

藩成立時の分士二十一名の選出の理由や方法ははっきりわからないが、岩泉義包の娘が中里正吉の妻で、仙寿院は正吉の娘で直房の母である。このように第一に姻戚、第二に盛岡在住時の正家と耕雲院(盛岡城奥

勤め)の人脈、仙寿院、直房、霊松院が交際している人柄や才能を見込んだ者、第三に姻戚関係にある盛岡藩士の次男や三男、これらをスカウトしたと考えられる。もりおか歴史文化館蔵の、直房が大浦治右衛門を誘う書簡がそのことを裏付ける。大浦(船越)宅は、霊松院の実家川口源之丞宅の隣である。無理を承知で頼み込んだ者のなかには、藩体制がある程度確立すると弟などを代わりに出仕させて盛岡帰参する者も現れた。大浦や新渡戸佐五右衛門は、その例である。佐五右衛門の娘吟(小君・重信死後松貞院)は重信の側室となって、南部勝信や七戸愛信を生んだ。勝信(佐五右衛門の孫)の妻は二代藩主直政の娘菊である。彼女は盛岡の永福寺に元禄7年(1694)8月に厨子入五智如来を奉納している。夫重信のため大日、世嗣行信のために阿闍、行信後継で直政の友人實信のために宝生、わが子勝信と親信と父母のために無量寿、兄弟と両息と母の息災延命などの祈願で不空成就を造立奉納したことが、厨子背面の願文により確認できる。現在は五尊とも石鳥谷の光勝寺に安置されている。八戸藩主家と新渡戸家には浅からぬ縁がある。近くの八重畑村は直房の旧領でここからも八戸藩士が採用されている。



写真4：光勝寺
大日如来坐像

『系図』に、川口氏の秀寛与十郎(正康)は父の遺領四百石をすべて相続したのではなく、旧地のうち百四十石あるいは百五十石を重直から賜り、重信の代に直房の願いで八戸に移り、家老となり、加増になったとある。実際は正康の死亡時に、嫡子万之丞が数え二歳で、奉公ができなくて家禄を没収された。『家系』では万之丞成長後に家名存続を約した書付があるとするが、結局は空手形で、『書上』にある衣服代は盛岡藩からの母子に対する捨扶持の二人扶持だった。利景(正利)母へのこの扶持は晩年まで続く。

また『系図』に正康が八戸藩成立後に請われて八戸に移り、家老になったとあるのは誤りである。藩成立の寛文4年(1664)以前の7年前の明暦3年(1657)に死去した人物が、成立していない八戸藩の家老にはなれない。しかし、豊山寺旧蔵福善寺紺紙金泥法華経〔以下『福善寺経』〕に霊松院の父覚性院と母耕雲院に続き涼岩東空禅定門とあり、彼女の兄弟と推定できる。『川口家過去帳』〔以下『過去帳』〕の梁巖棟公居士と極め

て音が近く、祥月命日が7月2日。正康のことであろう。『福善寺経』には正家、耕雲院、正康の法名の次に覚安一空禅定門とある。正家の心空、正康の東空とともに一空とあることから正康の弟と思われる。兄とは別に家禄百五十石を賜った可能性もある。『過去帳』は寛政以降の成立なので該当する人物は見当たらないが、霊松院は男2人女4人の6人兄弟姉妹であった可能性が高い。霊松院の祖父正義と父正家と兄正康による信直や利直への忠勤を、重直は歯牙にもかけずに取り潰している。

俸禄を失った川口家が本貫地で持っていた祖父正家とほぼ同じ四百石に利景がなるまで、明暦3年から元禄7年まで約40年の歳月が経過している。霊松院の感慨はいかばかりだったことか。直房生母仙寿院の実家中里家の六百石に比べればまだ二百石ほど少ない。利景は川口家で唯一家老を務めた人物で直政より5歳年上である。8歳で藩主となった直政とは幼少期を中里数馬(後の南部直房)邸で一緒に過ごし、江戸でも幼い新藩主の相手役を務めた。あまりにも身近で、人柄をよく知っていたからか、凡庸だったからか、直政は彼を家老に登用しなかった。養子通信が三代藩主を継いでから、霊松院への配慮から、その実家の当主で甥の利景は家老見習から始め、筆頭家老となる。通信初入部後の藩士や領民各層の代表との拜謁は利景を介して行われている。妻は中里弥次右衛門の娘。初代藩主生母と二代藩主生母の実家同士の婚姻で、川口家の繁栄を盤石にする布石であったが、利景は妻や嫡子に先立たれる。利景は妻の看病で六日間休み、病死後は十三日間忌引きをとっている。

川口家は、残念ながら当主の夭死や、嗣子がないために家名存続の危機に何度も直面する。特別な家柄なので血縁の養子によって家名は存続するものの家禄は減少した。中里氏のように藩の中核で活躍する人材を輩出出来なかった。霊松院は身内を大事にするものの、自ら度の過ぎた重用はせず、藩主にもそれを求めなかった。維新まで続いた川口家が藩主夫人の実家として四百石の家老格の家柄を保てたのは、利景の曾孫の幸助利秀までだった。その利秀の代は不幸が度重なる。享保15年(1730)に元服前にもかかわらず、家督相続が許されるが、当主母が死去し、その20日ほど後に自火で居宅を失い、歴代の什宝も灰燼に帰した。火事からほぼ1年後、11歳の若さで当主も死亡している。

正利の次男で利雄の弟秋堅は、寛文9年(1669)に

紫波庄左衛門と改名した朝倉源太左衛門秋邦（秋邦は耕雲院の兄弟か甥か。）の養子になり、左源太や十右衛門と名乗り、曾祖父正家の妻耕雲院の実家の家督を継いだ。その子作之進秋元は庄左衛門や武極と名乗り、最後には祖父利景やその祖父正家が名乗っていた源之丞を名乗る。この名は川口家の世襲名で、元服して與九郎や與十郎を名乗った者が、その後源之丞を名乗ることが多く、特別な名だった。幸助利秀が死去し、継嗣がなく断絶になるべきところ、及川惣八郎次男が養子に入って唱正令となり、三代続いた四百石の家柄から七十石に格下げとなった。川口氏の代わりに志和（紫波）氏が源之丞を名乗ったが、紫波源之丞の祖父も利景である。百石で相続した家禄を三百石まで増やし、加判役を務めた。その自負心がこの名を名乗らせたとも言える。

正令は七十石で家督相続してから精勤して百五十石まで加増になりながら、御納戸金の間違いを不吟味のまま放置したとして改易となった。正令の養子正詠は紫波源之丞三男で、秋堅は実家川口家を存続させ、與十郎や源之丞の世襲名も伝えたかったに違いない。正詠の養子正備は與九郎を、正備の長男正常は源之丞を名乗る。『書上』と『過去帳』により通名と諱が廃藩まで系図2のとおり確認できた。

『過去帳』は正備が寛政8年（1796）に作成し、子の正常が文化9年（1812）に整理し、文政2年（1819）には利景の百回忌法要を実施のために冊子を改め、嘉永元年（1848）には右平が法名を挟んで右に死去年月日、左に嘉永元年までの経過年数を記して作りなおした。右平のあとを子孫が慶応2年（1866）まで別筆で書き足している。自らも源之丞を名乗る正常は正家を元祖とし、正家と正康の二人に初代と、利景に元祖と脇書している。正保2年（1645）死去の源之丞正家と享保5年（1720）死去の源之丞利景を混同しているものの、文政2年（1819）が利景の百回忌にあたることを十箇年ずつ数えて確認し、利景夫妻百回忌と父正備の一周忌を一緒に南宗寺で行っている。布施を夫妻分は各七十疋、父分は五十疋と記す。

『過去帳』に耕雲院は紫波氏の出で、石塔は自家墓の上とある。藩主や藩主家の墓域にはないが、霊松院生母であるため藩主家同様に藩が年忌法要を実施していた。地震で倒れた耕雲院墓石（現在修復なる）の周辺に川口家の墓石は見えず、すぐ下は中里弥次右衛門家の墓域になっている。山崎、湊、煙山と重臣たちの

墓地が並ぶのに川口家だけ確認できなかったが、一段下がった叢に墓石が伏せて遺棄された場所に一際大きな五輪塔二基を含め大小様々な墓石を見つけた。南宗寺住職の許可を得て、地輪石を裏返して見ると利景の法名「南窓紹薫居士」と命日が刻まれていた。『過去帳』と照合して川口家の墓石数基を確認できた。もう一つの五輪塔は利景妻「鶴操妙亀大姉」のものと思われる。

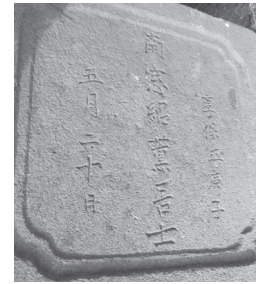


写真5：耕雲院墓石 写真6：川口利景墓碑銘（南宗寺）

3 霊松院建立澤口観音堂本尊准胝観音坐像胎内物

平成22年9月に本尊の膝前や、台座の蓮弁や光背の修理に先立って、八臂はじめ像全体の状況確認のためレントゲン撮影を行った。首から底部にかけて胎内に箱に納入された卷子が写った。瑤珞と重なって見えにくい部分もあったが、別当家の伝承のように遺髪や遺歯ではなかった。檜葉材の仏体内部を丁寧に内割りして、その中心に桐製箱を胸部と腹部に固定し、蓋には上下と墨書され、背面を向けて納められていた。羅に包み、絹糸で縫い留め、墨壺印が捺されていた。縫い留めは難しかったのか、それとも数え十二歳の妹富が兄のために縫ったのかやや稚拙だった。箱には細かく割れた沈香の破片が残っていた。卷子は紺紙に始まり、雁皮紙に楷書で一行九文字の四十一行記され、南禅寺先代住職剛室崇寛の手になる。最後の朱印は鮮やかで、軸端は六角に加工された水晶だった。幅14.1cm、長さ141.0cm。汚損など一切なかった。

天岸院殿江嶽宗雲大	居士者東奥州南部八
戸城主左金吾次将源	朝臣直房公之二男也
寛文三年癸卯正月十	有五日誕于盛岡小字
日運吉延宝五年丁巳	十一月十五日十五歳
而元服字曰彦次郎諱	曰直常同八年庚申改
字伊織天資敦厚孝道	以陸外講文武内帰仏
乘慈愛能令人動羨慕	之情同年夏五月感微
恙歴日疾病針藥亦不	効六月廿二日享年十
八而卒于江戸城下閤	維瘞葬于勝林山下茲

有無深者舊号成海與	右衛門尉自
大居士襪襪之中陪侍	于行于坐沐恩渥者年
尚矣逢此不祥之貶五	内俱裂而不堪悲哀追
恋之餘自薙髮投地隱	于磐手郡之内盛岡之
幽處為	大居士修香花之因成
欲終一生於此地之謀	今年天和壬戌六月廿
二日己丁第三回忌之	辰構一堂宇命工彫刻
準胝觀音靈像一軀禮	拜供養為
大居士結廿二日準胝	觀音勝縁同入圓通清
浄之門無深价人告其	志而請記之予聞其言
嘆云信心之篤志誠之	固可謂知恩報恩茲感
其志之深記顛末云	

前南禪剛室叟 朱印



写真7：胎内の納入状態 写真8：水晶の軸端卷子

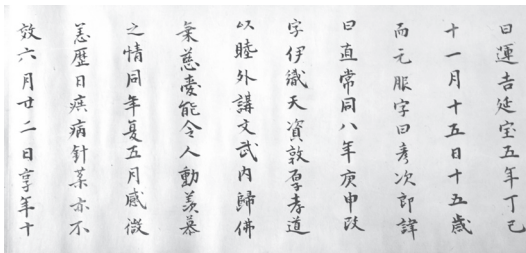


写真9：直常の人柄部分

内容は、初代八戸藩主南部直房次男直常の生涯と人柄にふれ、病死後、傳役成海與右衛門尉が悲嘆にくれ出家し菩提を弔っていることに感動して剛室が筆を執ったとある。仏像自体と胎内卷子は納入完成後、一度も修理を受けていなかった。記録用写真撮影後は、元の状態のとおり胎内に戻された。一連の修理、確認作業は（株）京都科学的那須川善男氏によって行われた。卷子の文は『紫波郡誌』〔以下『郡誌』〕や『八戸祠佐嘉志』〔以下『佐嘉志』〕などに「澤口観世音縁起」として記載されたものにあたるが、卷子の題箋に墨書はなく、巻頭にも題書はなかった。『佐嘉志』をまとめた撰待治脚は、『奥南温故集』にあるように現地に赴いて実際に見聞し、貞享五年棟札も一緒に収録した。胎内のものは天和2年（1683）以降見たものはなく、控えを写して収録したらしい。『佐嘉志』に比べ『郡誌』には誤写が多い。

4 直房と直政の父子の虚空蔵菩薩信仰

『佐嘉志』「長者山虚空蔵大菩薩」に、直房がまだ盛岡で部屋住だった時に、下小路水口坊虚空蔵（現在の岩手高校あたり）に祈願して寛文元年（1661）に直政の誕生を得たとある。承応2年（1653）に直房の命で山伏となった元家士高橋勘五郎こと無量院があたり、明暦年間から行っていた。この子は、直房兄で家老の七戸隼人（後の盛岡藩主南部重信）から武太夫の名を賜り、無量院は彦八郎の名を送った。直房は八戸入部に際して盛岡から願永寺内に建立した御堂に虚空蔵菩薩を移し、無量院を寛文7年（1667）に八戸藩領の山伏の総録に任命し、常泉院と改名させ、福田村に三十石を与えた。寛文13年（1673・延宝改元）には領内総廻りの勧進をした。延宝6年（1678）に長者山に新社が建立され、虚空蔵はここに移った。この時糠塚村に二十石加増合五十石になった。正面が新羅堂、右虚空蔵堂、左愛宕堂で三社になった。

「寫守村虚空蔵菩薩」には、貞享4年（1687）に直政が島守の高松寺住職に虚空蔵一体を預け、元禄5年（1692）に虚空蔵堂を建立して移したとある。

「虚空蔵縁起」は寛文13年（1673）に無量院栄尊によって書かれ、直政の命で寛文9年（1669）に熊野へ武運長久などのため参詣の際、京都に立ち寄り、沈香で一代本尊の虚空蔵菩薩像の製作を仏師に依頼したとある。全国各地に有名な虚空蔵があるが、もとはみな伊勢の朝熊山金剛証寺なので、これと同様の像の製作を中里清左衛門吉廣に託した。完成後、朝熊山の連珠池（現連間池？）で清めて、高壇に安置して燭花香を献じ、読経して開眼供養後、八戸に持ち帰った。寛文10年（1670）に直政と弟直常が一緒に痘疹にかかった時に虚空蔵に平癒祈願をしたら夢に、翁の姿をした虚空蔵が現れ偈を与えたので、その様子を必死に書き取った。その直後、江戸から両君の回復の便りが届いて、虚空蔵の霊現だと確信した。そこで積善の士たちから資金を集めて急遽小堂を建てた。

「常泉院由緒書」には、直房の武運長久や名利繁栄の祈願を命ぜられたこと、毎年正月十一日の弓初の勤行を数年執行したこと、子孫繁栄を盛岡水口虚空蔵へ祈願したことなどが記される。万治3年（1660）7月25日から7日間参籠して読経や咒を唱え、8月1日結願した。その明け方の夢に僧が出てきて、「百代をのせて車にうしのとし」と言ったので、水口坊別当法明院日栄にその話をすると吉祥に違いないと言われ、願主

の直房に報告。すると奥様が8月に懐胎して翌寛文元年（1661）歳次辛丑5月6日に直政が誕生した。丑寅年生まれを守り本尊に祈願した甲斐があった。伯父隼人正（重信）は武太夫、日栄が運八、無量院（常泉院栄尊）は長鶴とつけた。

また、仔細あって盛岡米内の薬師虚空蔵（現在の浅岸薬師神社・くるみ幼稚園東隣・盛岡城下から丑寅の方角へ4.5km徒歩60分）へ毎日、中里数馬が般若心経を一巻ずつ書写して、無量院が百日間の代参をした。寛文4年（1664）10月下旬から翌年の2月上旬まで行い結願した。その甲斐あって、幕府からの上府命令が出て、寛文4年の11月16日に盛岡を出発し、江戸において、12月6日には2万石を家督するように命ぜられ、左衛門佐様になった。寛文5年（1665）夏に栄尊は直房の命で上方へ派遣された。寛文8年（1668）6月24日に直房が死去し、直政が江戸に登って家督相続を命ぜられお礼の挨拶回りも済んだ際に、直房生母仙寿院から先代が特別に信仰なさった神仏は何かと下問があって、直房公は一世の守神として虚空蔵菩薩を信仰していたことなど仔細に応えた。そこで栄尊と中里清左衛門吉廣が命じられて京都に派遣されて木造一体を調べて、伊勢の朝熊山で明王院に連間池の明星水で加持した後、開眼供養を終えて、江戸の藩邸で皆様に拝礼してもらって八戸に戻って私宅で香花と灯明と供物を捧げて礼拝していた。せめて小宮建立をと思っていたら、長者山に社地を得て御堂を建立でき、藩主の武運長久栄々繁昌の祈祷をしてきた。承応元年（1652）、^{ママ}某父中里弥次右衛門の家臣としてもらって勘五郎の名前をもらった。四年後法師になって無量院の院号を頂戴し、祈願を任された。

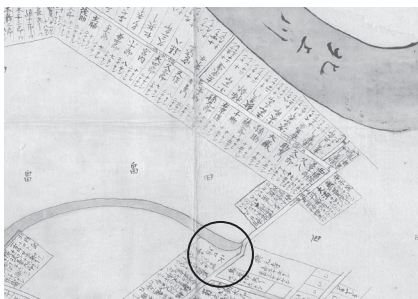


写真 10：岩手県立図書館蔵「盛岡城下図」水口坊部分

それぞれ少しずつ差異はあるものの大筋を要約すれば、部屋住みの中里数馬（後の南部直房）は、盛岡水口坊の虚空蔵に七日間の祈願をして、後継ぎ直政の誕生を得た。直政の幼名武太夫は伯父重信の命名である。また数馬は盛岡米内薬師の虚空蔵に百日般若心

経奉納参詣祈願をした。無量院が代参した。これにより八戸藩主になった。この両方の祈願をしたのが無量院で、もと高橋勘五郎という家士で、直房の命によって山伏になった者であった。以後、彼は直房霊松院夫妻からの信頼が厚く、八戸藩領の修験の総まとめ役となり、常泉院栄尊となった。直房（あるいは仙寿院・直政）は、常泉院と中里清左衛門に命じて京都で虚空蔵菩薩像を造らせた。像は朝熊山勝峰山兜率院金剛證寺で開眼供養を行い江戸で披露の上、八戸に持ち帰った檀像で、明治初年までは三社に祀られていた。盛岡水口坊から八戸に移した虚空蔵はどこに行ったのだろうか。三社にあった像とは別であるから、直房が直政に譲ったものか、直政が建立を命じた島守の高松寺が別当をつとめた福一（威知）満虚空蔵菩薩こそがこれにあたるのではないだろうか。明治の神仏分離令に伴う廃仏毀釈の嵐から、地元住民によって守られた像は髻に隠せるほどの大きさだ。



写真：11 高松寺虚空蔵菩薩と直政名の残る棟札

5 直政と直常の出生地

直房と霊松院の間に生まれた直政と直常の誕生地はどこか。霊松院の実家は二人の出生前に改易になり、母耕雲院の実家朝倉氏も無禄状態なうえに耕雲院は城奥勤。従って、霊松院は婚家の中里数馬邸で生まざるを得なかった。数馬邸は現在の四ツ家教会と盛岡中央郵便局の向かい側の、内濠の直角に曲がる場所にあった。直政は寛文元年（1660）5月6日生まれで、直常は寛文3年（1662）正月15日生まれである。



中央上部中里数馬屋敷 左下川口源之丞屋敷
写真 12：岩手県立図書館蔵「盛岡城下図」

6 延宝分限帳

八戸南部家文書のなかに、『延宝三乙卯年 直政公御家中分限帳 六月 御勘定所』がある。澤口観音堂別当成海家の先祖名が見える。御切米のなかに「拾駄成海与左衛門」とあり、御扶持方のなかに「壺人扶持成海与左衛門娘」とある。成海与左衛門は二十石で、娘は六石に相当する。延宝8年(1680)に南部直常が病死した際に出家して無深と号し、菩提を弔った傳役成海與右衛門尉と与左衛門は同一人物だと思われる。この延宝3年(1675)に直常は数え13歳。直常の身の回りの世話をしていたのが傳役成海の娘だったとも推測できる。観音堂の別当として藩から十石を与えられ、藩士でなくなったので、その後の分限帳に成海の名は消える。傳役の俸給がわかる貴重な資料だ。『寛文分限帳』には成海の記載がない。直常誕生間もなくの出仕なのか、詳細はわからない。紫波庄左衛門が五駄式人扶持で、三丁目傳兵衛(後の三條目)が拾駄式人扶持で、『書上』と一致し、書写時期は特定できないものの、内容は当時の知行や扶持そのままを伝えている。

7 南部直政奉納の二組の紺紙金泥法華経

直政が貞享3年(1686)に庄内出身の僧理運に書写させ、国元の祈祷寺自在山豊山寺に奉納した紺紙金泥法華経の序文は筑波山権僧正隆光に依頼し、貞享4年(1687)6月18日の日付で理運が巻頭に書写している。一卷には直政の父方縁者の法名と祥月命日が記され、地側の銀の罫線下に書写の功德に結願する縁者の名が列挙される。すでに病死した弟直常の天岸院や川口与十、母、内(利景夫妻と母)とあり俗名は不明ながら結縁者であった。フク、キン、ナニハなどの実名があり、中里を中と略している。少額なりとも結縁の寄進をしたのだろう。三巻には直政の母方縁者の法名が並び、日蓮宗僧侶をはじめ、出家者の名前が多い。四巻には庶民の名が多く、八戸、江戸を問わず、結縁者を募ったようだ。八巻には、直政、^{三三}齡(靈)松院、市橋正(政)勝、富、千(仙)、菊の名が見える。男子の武運長久子孫繁昌と女子の息災延命を祈願している。28cmの高さに長さが9mほどの全八巻は江戸で書き始められ、庄内で書き終えている。書写順は一卷、二巻、三巻、八巻、四巻、五巻、六巻、七巻で、八巻を8月4日に終えてから最後の七巻は8月29日に仕上げている。隆光の序文によれば、除難招福と領土安寧と五穀豊穰に生母

靈松院の健康長寿を願い父方と母方の物故者の追善供養を兼ねている。

実は直政は、この外にも元禄3年(1690)に真言宗豊山派総本山長谷寺にも紺紙金泥法華経を奉納している。経文の部分はこちらも理運が書写しているが、巻末に直政直筆の部分に奉納の趣旨が記されている。漢詩文に優れ、博学であったことは知られるが、些か自信過剰にも感じられる。柳沢吉保が側室正親町町子に語ったとして『松蔭日記』に「利発過ぎてはだめで、充分に相手の意に沿うように、能ある鷹は爪を隠すようにしなくてはならない。」と直政のことにも言及している。用語が大変難しい。

右取奉献金字大乘妙典全部八本今

茲庚午之春請釈理運以勵毛穎之力從

孟陬之初至首夏之半悉終書写之功即

使理運齋特之遠詣

上刹欽藏

宝殿蓋所以奉謝昔日無窮之洪恩也伏惟

大慈大悲觀世音菩薩須弥之高不足以比

其德金輪之深不足以論其恩嗚呼大哉

盛哉巍々威神之力忽拔衆生被厄之苦

種々方便之誓速與福聚無量之樂能

解枷鎖之難更施無畏之喜不罹推墮

之禍害得蒙空住之利益慈意雲起甘

雨降惠日普照灾風咸伏悲願之厚寔

莫不命於心肝感應之迅豈不傾葵藿之

誠庶幾後來乘飛龍之化得大鵬之志雖

升降天地而無毫釐之妨雖翱翔南北而

無尺寸之障又禱早避嫌疑之名永住安

樂之境況是一乘之德度越於諸聖教之

上牛車之力絶勝於他羊鹿之功故今獻

此經以報其恩則志願之効豈其空乎

仰冀

大士俯乘照鑑

元禄三年五月令日

遠江守從五位下源朝臣直政稽首和南

謹書

八戸藩は江戸に金地院、国元に南宗寺と臨濟宗の菩提寺を持つ。この外に隆光との縁からか、藩主家祈祷寺として城内に豊山寺を設けた。これはもと根

城にあった東善寺を移し、花巻八幡寺出の住職恵廣が延宝4年(1676)本山に登り、長谷寺小池坊十一世能化俊盛から授かった寺号である。八嶋山福善寺蔵の錫杖を持つ長谷寺式十一面観音菩薩は、厨子裏に小池坊卓玄が開眼したとあり、『八戸藩目付所日記』元禄10年4月26日にあるように江戸から理運が運んだ豊山寺の本尊と考えられる。



写真 13：福善寺
十一面観音像

8 靈松院の遺産

同じく八戸南部家文書のなかに『靈松院様御金御米之覚』という文書がある。正徳4年(1714)甲午年五月廿二日付けで、野中八郎兵衛、山崎勘兵衛、湊九郎兵衛、瀧川左太夫、川口源之丞の5人の家老連名で黒印をそれぞれ捺している。宛名は山村平馬殿御納戸衆中となっている。外に左京様奥様に仕える^{つぼね}不年、^{たかの}た可野、加藤弥兵衛が受取った覚えとして5人の家老宛ての文書もあるので、正徳3年(1713)閏5月20日に靈松院が八十歳で死去し、その遺産が娘富に相続されたことがわかる。長男直政、次男直常はすでに死去していて、富しかいなかった。左京様奥様とは交代寄合の仁正藩世嗣市橋政勝が左京様で、その政勝正室の直房第三子長女富を指す。市橋家の事情で政勝が廢嫡になった際、離縁され実家に戻り年老いた母の世話にあたった後の操松院である。

金銭は五百四拾五両三歩ト砂三拾七匁式分四厘式毛ト銭式拾壹貫百四拾三文で、貸付中のは正徳3年(1713)よりは無利子とされ、八戸で貸付けられていた。砂(金)四匁七分壹厘七毛は志和御百姓どもに無利子で貸付けられ、八戸での貸付はなかった。米三百貳拾三駄片馬壹斗五升六合は志和御百姓どもに貸付けられ、正徳3年(1713)以降は5ヶ年賦となり、八戸に貸付はなかった。金、砂、米の三通の帳面で報告している。

七崎村からの小物成分十八両をはじめ、藩からは毎年、江戸の広尾屋敷の靈松院あてに賄料や紫根が送られていた。出家していて、高齢でもあり、支出は抑えていたのだろうが、国元の藩主家の年忌法要への金品の寄進や、国元の社寺の復興修理再建などには必ず御

初尾(初穂料・布施)を欠かさなかった靈松院は領地の八戸や志和で金融をして財産の維持を図っていた。貸付米や砂金が志和に限られることから、靈松院の領地が志和代官所館内にあったと考えられる。幼少期に姉妹で母耕雲院の実家志和の朝倉家を訪れたことがあるのではなだらうか。分藩時に志和を飛地として希望したであろうことや、澤口観音堂を志和の土館に建立するなど志和との関連が深いのは、母耕雲院の故郷が志和だからと考えられる。

9 おわりに

八戸藩の藩政確立期であることから、幸いなことに靈松院関連の文書は意外に残っている。『川口家系』の内容を裏付ける戸来幽松から小笠原善弥への書簡も残る。二人の立場などの考察はこれからである。内堀家菩提寺新仙寺『内堀家過去帳』に天倫院の名を見つけ、墓石が確認できたが、千種家の菩提寺はどこか。大釜家菩提寺東林寺や八戸藩士漆沢家墓地調査もこれからである。川口家は維新後に北海道へ移住したらしいが、その書簡も未調査である。少女孝が育った川口城跡は主郭部分の平場は栗林になっているが空堀など見事で、今後の発掘調査による新発見が期待できる。

南宗寺のご協力を得て川口家墓石の悉皆調査を行いたい。調査が縁で耕雲院墓石が南宗寺によって修復され大変な難かった。盛岡の浅岸薬師神社には火事により古文書は伝存しない。長谷寺奉納法華経も全巻調査をしていない。系図1と系図2については現在知り得る限りで作成した。三社堂の虚空蔵像はどこに消えたのか。遺産相続の在り方や忌服の仕方なども研究の素となるものが見つかった。光勝寺大日如来坐像厨子内底部には和歌が確認できた。厨子や仏像の修理を伴う調査が出来ればと思っている。

八戸の市立図書館、市史編さん室、南宗寺、福善寺、高松寺、岩手町の明圓寺、花巻市石鳥谷の新仙寺、光勝寺、岩手県立図書館のご協力によって稚拙な調査研究が少しずつでも進んだことに感謝します。

参考文献

- 福留真紀著(2011)『將軍側近 柳沢吉保 いかにして悪名は作られたか』新潮社 新潮新書
 増淵勝一訳 正親町町子著(1710)『松蔭日記』国研出版
 福留真紀著(2009)『名門譜代大名・酒井忠孝の奮闘』

角川学芸出版

前川隆重・加藤章・樋口政則・山本實（編）（1985）

『南部藩参考諸家系図』第一巻から第五巻 国書刊行会

八戸市立図書館市史編纂室（編）（2001）八戸の歴史

双書『八戸藩士系譜書上』八戸市

八戸市立図書館市史編纂室（編）（2002）八戸の歴史

双書『八戸の神社寺院由来集』八戸市

森越良（編）（1993）『解説八戸藩目付所日記』八戸古

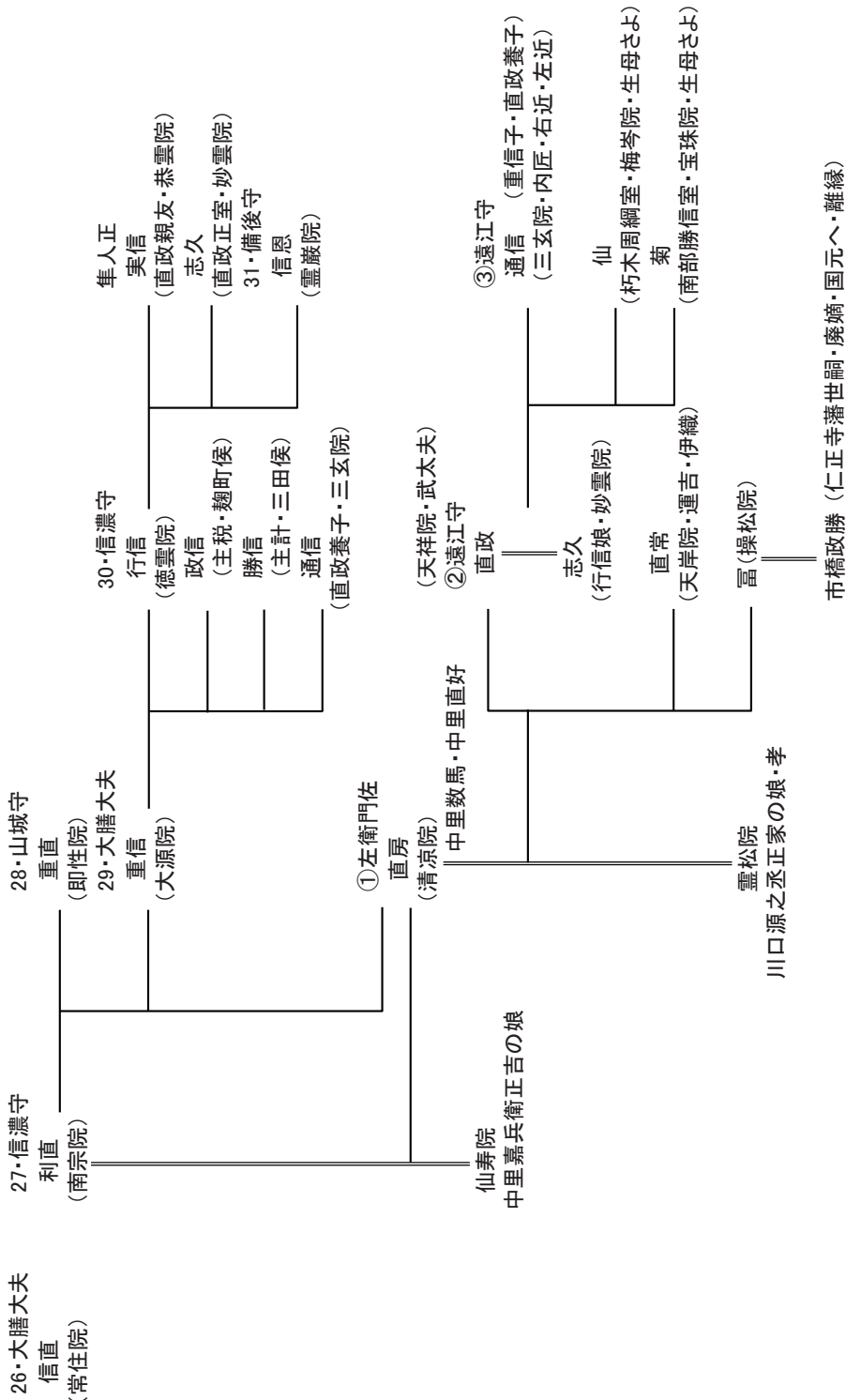
文書勉強会

要旨

八戸初代藩主夫人霊松院の実家川口家の改易のことや次男直常追善の准胝観音像に胎内物があったこと、直政奉納の紺紙金泥法華経が2組存在すること、直房・直政父子の虚空蔵信仰などを紹介した。

キーワード 霊松院 南部直政 紺紙金泥法華経 虚空蔵信仰 准胝観音胎内物

系図1 八戸藩成立前後の盛岡南部家と八戸南部家



系図2 川口家と志和(紫波)家

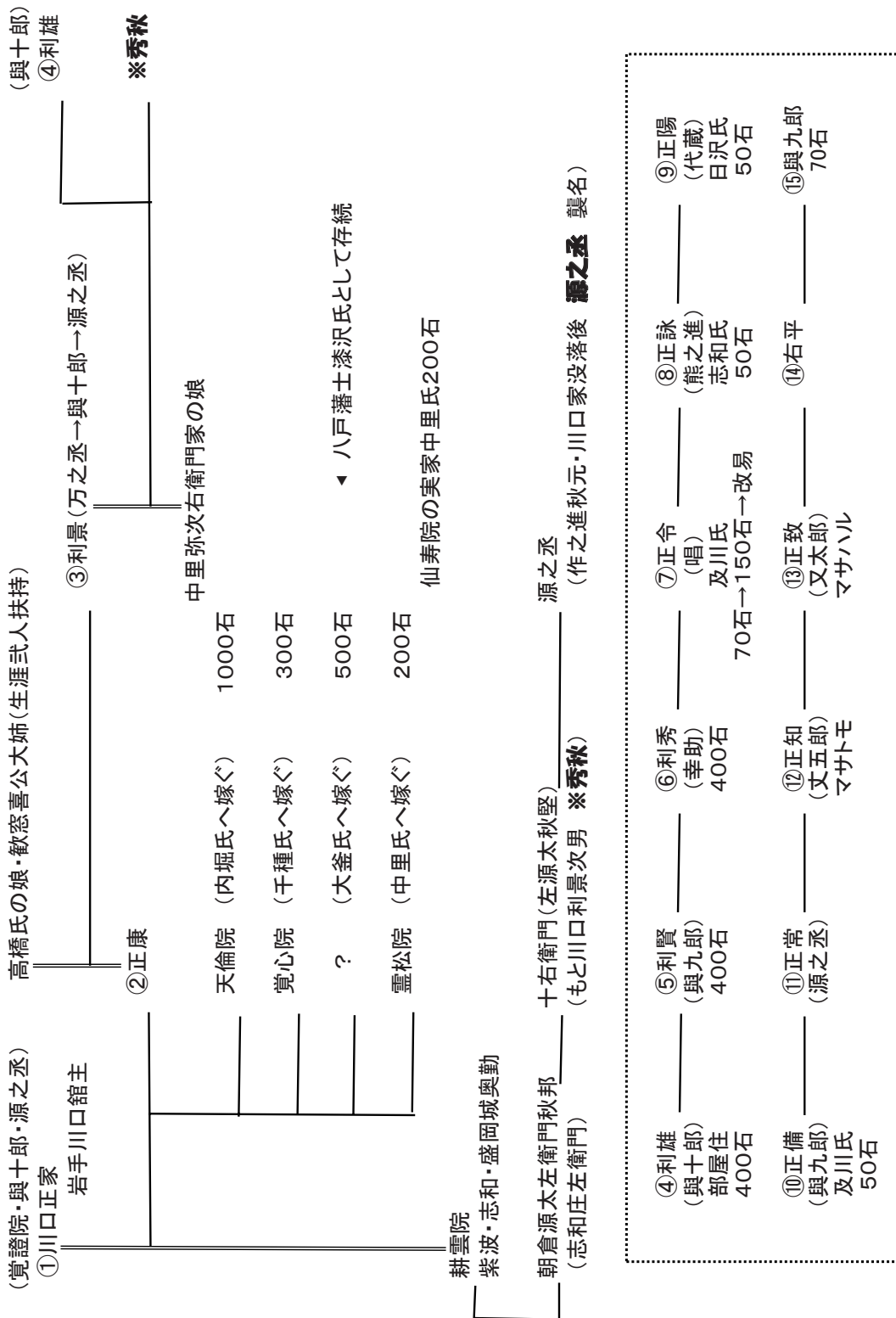


表1 川口孝・中里孝・南部孝・霊松院の生涯 参考『八戸藩目付所日記』(寛文6・寛文10・延宝4・元禄元・元禄6・元禄11は伝存しない)
 (※表は年号・西暦・年齢・事柄)

寛永11	1634	1	孝生まれる	延宝元	1673	40	後の三代藩主通信生まれる
寛永13	1636	3	父正家明圓寺を開基	延宝2	1674	41	義母仙寿院江戸で死去
寛永14	1637	4	明圓寺に銅製懸仏奉納				直常22両志和百姓に貸す
正保3	1646	13	父正家死去				※直常はこのころ八戸で藩主代行
			兄興十郎正康死去(川口家改易)				旧冬直政遠江守任官
明暦3	1657	24	甥万之丞利景を養育 母耕雲院城奥勤	延宝3	1675	42	母耕雲院 八戸→内堀織部→江戸
			※中里数馬と万治3年までには結婚				志和公事 成敗・關所・科金
寛文元	1661	28	長男直政を生む				東善寺改名し豊山寺となる
寛文3	1663	29	次男直常を生む	延宝5	1677	44	川口万之丞母式人扶持生涯下さる
寛文4	1664	30	八戸藩の成立 呼称奥様				直常元服 彦次郎 八幡へ前髪奉納
寛文5	1665	31	義母仙寿院開伊尾崎社参詣				披纏式千枚煎海鼠二三万昆布沢山
寛文7	1667	33	両若殿様御袋奥様各所参詣受饗忒	延宝6	1678	45	盛岡町村井権兵衛礼金10両新酒屋
			夫直房八戸で死去(孝出家→霊松院)				楯山善左衛門屋敷→川口興十郎(耕雲院願)
			直政8歳、万之丞13歳				豊山寺十一面法御祈禱
寛文8	1668	35	栗山雖矢に上方物の購入依頼				直常の80両志和へ
			知足院隆光から大般若御札枝柿届く	延宝7	1679	46	直常の77両江戸へ
			重信と仙寿院の書簡のやり取り頻繁				虚空蔵へ10石寄進合計20石
			長女雷を生む				川口興十郎屋敷→津村伝右衛門
寛文9	1669	36	川口万之丞家来江戸から逃げて盛岡の				次男直常死去
			千種庄之助方に居る←紫波庄左衛門迎へに行く				耕雲院 盛岡へ行って帰る
			志和郡と奥郡に御境塚を築く	延宝8	1680	47	御絵図・御境絵図など江戸盛岡と交信
寛文12	1672	39	重信と仙寿院、中里村と七崎村交換				孫娘仙誕生(生母さよ)
			常泉院に虚空蔵堂建立	天和元	1681	48	盛岡で利直50回忌、名代川口興十郎

天和2	1682	49	長女置 市橋政勝と結婚 靈松院の仰入で紫波庄左衛門地方百石	直政乳母松屋妙龜死去 鵜飼家・岩泉家相続となりなし
天和3	1683	50	直常追善のため准胝観音像造立	大慈寺梵鐘船便着
貞享元	1684	51	母耕雲院死去 家中面々へ呼上 下賜物	岩野庄五郎撞鐘奉行 豊山寺 (住職) 御勘気→退院 通信母生院死去
貞享3	1686	53	靈松院様志和米と御雷様八戸米 江戸への御用金 2912 両 (参勤交代費用含む) 方々へ柚子蜜柑銘々御書付のとおり	靈松院澤口観音堂へ華鬘奉納 (13 回忌) 漆沢金兵衛夫妻・同茂衛門合五人扶持 上々様詫で買い走り三上弥左衛門赦免
貞享4	1687	54	島守虚空蔵長床建設 常泉院へ 2 両 成海無心←天岸院様御菩提のため観 音建立仕度由 志和に社領拾石并屋敷賜る	元禄5 1692 59 元禄6 1693 60
貞享5	1688	55	志和御代官家 11 両で落札 豊山寺延焼 本尊と系図やと救出 直政豊山寺に紺紙金泥法華経奉納	市橋政勝廃嫡により雷離縁 志和米と靈松院様米の管理担当村井市兵衛 川口源之丞娘の忌引 (中里清左衛門息子外記の妻か?) 直房法事入用品寺社へ配布
元禄2	1689	56	澤口観音堂建立 元禄に改元 直政側用人 行信娘志久と結婚 明圓寺に花立と香炉を寄進 (燭台も?) 紫根八駄の内三駄靈松院様分	元禄7 1694 61 元禄8 1695 62
元禄3	1690	57	通信、澤口観音堂へ華鬘奉納 志和代官靈松院様御金米并御無尽 金本払勘定済を披露 直政長谷寺に紺紙金泥法華経奉納 志和庄左衛門養子左源太 7 歳お目見え 岩野庄五郎・七三郎奉公始まる	虚空蔵新羅愛宕三社遷宮 (靈松院代参川口源之丞) 將軍綱吉儒学御講釈御拝聴 常泉院米尊祈禱のおかけ初穂寄進 古源之尉 50 回忌法要 於大慈寺 (7・22) (川口源之丞正家 靈松院の実父) 法事主 川口與十郎・斯波庄左衛門 八重畑茂右衛門ら無調法 詫入赦免 仙と朽木主水周継の縁組なる 仙寿院 23 回忌法要

元禄 9	1696	63	<p>霊松院澤口観音堂へ17回忌華鬘奉納</p> <p>松屋妙亀7回忌、直常17回忌法要</p> <p>64疋の犬江戸→八戸(付人10人)</p> <p>耕雲院13回忌法要 七崎物成金18両</p> <p>豊山寺本尊観音到着(理運)</p> <p>岩鷲山御代参桂清水参詣願多し</p> <p>紫根 江戸へ合計15駄(霊松院・雷)</p> <p>平中仙寿院様御墓所庵主に式人扶持</p> <p>地藏堂建立(中里地藏カ)</p> <p>直政見舞いの家臣、頻繁に江戸へ</p> <p>直政死去(遺言葬礼江戸埋葬八戸)</p> <p>麻布屋敷類焼 舌駄片馬衣類形見分</p> <p>木村清三郎・福田六太夫遠慮解かれる</p> <p>岩野庄五郎・坂本権兵衛妻に各10両</p> <p>吉都豊都に粟式駄米舌駄終身下賜</p> <p>湊→三間四間の廿八日町地藏堂建立</p> <p>文林全集拾冊 接待忠兵衛もたらす</p> <p>仙寿院27回忌法要 志和庄左衛門死去</p> <p>漆沢惣十郎老父惣次郎に舌人扶持</p> <p>南宗寺本尊唐様釈迦像を直政名で奉納</p> <p>南宗寺へ文林全集奉納 隠居へ5両</p> <p>岩野庄五郎父子坂本権兵衛妻各拾両</p> <p>清涼院墓守清心・仙寿庵主式両式歩</p> <p>志和庄左衛門跡式倅左源太</p>
元禄 13	1700	67	<p>直常・直房・耕雲院の法要</p> <p>紫根七駄(表三駄・霊松院四駄)</p> <p>龍松院公慶 来迎寺宿泊(百石付巻歩)</p> <p>盛岡藩世嗣隼人正実信死去</p> <p>天祥院様御第3年忌法事</p> <p>摂待久左衛門・理運 高野山直政石塔建てる</p> <p>神太郎左衛門外5名隠居家督相続</p> <p>上々様通信御入部の御祝儀</p> <p>紫根この年合式拾巻駄</p> <p>漆沢千太郎 霊松院様付衣服代参両</p> <p>来迎寺 浄生院位牌所により地形30石</p> <p>南都龍松院に50両の為替手形</p> <p>栃内金右衛門新百石</p> <p>浄生院の位牌南宗寺へ移す</p> <p>勝手不如意 御次削減・下代身帯召上</p> <p>江戸詰三名不行儀御暇 日沢氏(地方→金成)</p> <p>松屋妙亀13回忌大慈寺に舌儀舌両</p> <p>霊松院様方黒沢孫右衛門死去につき5両</p> <p>借上倅に式人扶持</p> <p>御家中下々朝は粮食 夕は何粥にても</p> <p>漆沢惣次郎口上書 霊松院が拾人扶持</p> <p>時節柄三人扶持でも舌人扶持でも構い</p> <p>ません→霊松院様と要相談</p> <p>通信各寺施入:揚弓之矢五本入一箱</p>
元禄 14	1701	68	
元禄 15	1702	69	

元禄 15	1702	69	南宗寺にて重信 49 日法要 志和不作検見派遣 (領内当夏霜害風雨) 久慈の薫陸香持出 (拾駄につき 5 両) 菅駄は正味 30 貫目 靈松院様奈良大仏勸化 50 両 (藩同額) ※盛岡重信六月・行信十月死去 火災麻布市兵衛町屋敷残らず消失 凶作で半身代 志和代官餓死人 3 馬 25 疋牛 6 疋報告 京富小路徳兵衛薫陸香礼金拾両 市兵衛町藩邸類焼 靈松院市橋邸へ 大地震藩邸塀倒れる 広尾の大膳様御家 (重信邸) へ移る 座頭支配豊都死去仮に吉都後任 無筋御願御在所近江引越 富広尾へ 靈松院のとりなし 津村伊太夫許される	宝永 3	1708	73	源之丞に治助・弥次右衛門家老職指南 直常 27 回忌法要 通信来迎寺で浄生院へ焼香 揚弓興業 七寺料理賜る 直常法要来迎寺に米壹俵 護持院と金地院に 20 両ずつ返却 紫御用片駄靈松院片駄 (鬼柳通過証文) 中里弥次右衛門病死 源之丞遠慮不参 源之丞帰国 殿様上々様の様子伝える 高野作太夫の母長野の身帯八両につ いて靈松院様から委細仰付けあり 靈松院様御物成金毎年通拾八両 ※源之丞 通信の参勤御供 3月21日八戸発→4月6日江戸着 9月14日から11月18日まで出勤なし 8月12日八戸帰国
宝永元	1704	71	津村伝右衛門隠居伊太夫家督相続 川口源之丞 弥次右衛門付家老見習 盛岡藩領境目に源之丞判鑑 15 枚配布 川口源之丞御在所江戸御内御用加判 直政 7 回忌法要 仙寿院 33 回忌法要 仙寿院法要 各寺に靈松院から寄進 川口源之丞加判役 (通知判鑑配布) 通信娘豊御喰初 重役夫婦で料理頂戴	宝永 4	1707	74	浄生院香典金百疋 盛岡聖寿寺へ 御具足餅下さる時 源之丞筆頭 利幹家督相続 殿様同道登城 富士山噴火 四百両上納 殿様下向 13 家に道掃除と水撒き 南宗寺隠居江心と通信呢懇 重信の法要 南宗寺 蹴鞠興業
宝永 2	1705	72		宝永 5	1708	75	
宝永 3	1706	73					

<p>岩野庄五郎毎年の通御霊屋盆中灯籠</p>				<p>広信誕生日祝儀 番頭以上お目見え</p>
<p>例之通 蓮ノ飯 源之丞らに冷麦</p>				<p>熨斗を源之丞引く 料理吸物酒下さる</p>
<p>秋林院 (通信室前田利明妹友) 法事</p>				<p>江戸登面々身帯役家来減少の許可出る</p>
<p>五寺が揚弓の相手その後料理</p>				<p>広信の外出 お供源之丞治助</p>
<p>揚弓同日蹴鞠 源之丞御馳走人</p>				<p>源之丞不快故出勤之無 6日間</p>
<p>靈松院へ紫吉駄 四節祈禱礼</p>				<p>横枕観音堂建立 (売市行者堂脇へ)</p>
<p>妙雲院 通信娘に於か川 (勝) と命名</p>				<p>源之丞妻死去 服喪 5月18日～6月1日</p>
<p>源之丞知行地から山立呼び熊狼退治</p>				<p>直政長女仙朽木周繼妻 (梅岑院) 死去</p>
<p>殿様田屋荒屋へ 源之丞肴折指上</p>				<p>耕雲院 27回忌法要 南宗寺</p>
<p>江戸広尾で三上弥助を四戸金兵衛殺</p>				<p>御年寄衆并御役人中御寺相詰出勤なし</p>
<p>書置きし自害 二人共靈松院御取立者</p>				<p>直政 13回忌法要 焼香名代</p>
<p>靈松院様方漆沢惣十郎へ御用状</p>				<p>殿様：川口源之丞 靈松院：中里寛右衛門</p>
<p>中里寛右衛門養子與右衛門弟友七</p>				<p>妙雲院：津村伊太夫</p>
<p>(従弟で甥を娘婿として)</p>				<p>操松院：池田右衛門</p>
<p>通信 年始御規式 源之丞料理相伴</p>				<p>宝珠院 (菊)：岡本源右衛門</p>
<p>寺社方へ手自御盃 昆布は家老から</p>				<p>広信：栃内金右衛門</p>
<p>町人衆 御縁側で盃 御熨斗は源之丞</p>				<p>法事用造花献上者に礼状</p>
<p>法光寺南宗寺相談 龍峰山仙寿寺に</p>				<p>御納戸御紫荷五駄靈松院御紫式駄</p>
<p>類の死骸 御浦御門→来迎寺前→寺</p>				<p>実相院 (広信生母類) 3回忌法要</p>
<p>寺：本寿寺 広信実母 (実相院)</p>				<p>高野山遍照光院使僧傳泰坊へ御初尾</p>
<p>神明御遷宮 靈松院 縣錢百疋奉納</p>				<p>拾六両式歩・錢八百式拾六文壹歩</p>
<p>桂清水5日間長者山念仏堂御開帳</p>				<p>類家地藏堂完成</p>
<p>靈松院并広尾上々様方へ</p>				<p>殿様御勝様宮内様広尾御三所と</p>
<p>岩泉嘉兵衛方の借金五拾両返却</p>				<p>主税様主計様主水様へ寒中見舞</p>

清涼院様	中里直好・数馬・南部直房
父南部利直	母中里正吉娘（仙寿院）
靈松院様	初代直房夫人・孝
父川口源之丞正家（岩手川口）	母耕雲院（志和）
天祥院様	南部直政
父南部直房	母川口源之丞正家娘（靈松院）長男武太夫
天岸院様	南部直常
父南部直房	母川口源之丞正家娘（靈松院）次男運吉
左京様奥様	市橋政勝正室・操松院・雷
父南部直房（左衛門佐・清涼院）	母靈松院 長女 雷
妙雲院様	二代直政正室・志久・数
父南部行信（信濃守・徳雲院）	母？
主水様御奥様	朽木周繼正室・梅岑院・仙
父南部直政（遠江守・天祥院）	母さよ 長女
主計様御奥様	南部勝信正室・宝珠院・菊
父南部直政（遠江守・天祥院）	母さよ 次女
御新造様（前田利明娘友）	三代通信正室・秋林院
実相院様（桂七郎大夫妹類）	通信側室広信生母
お勝（通信娘・正智院）	母荒木田武兵衛娘かよ寿仙
修理（通信息・広信弟・空華院）	母荒木田武兵衛娘かよ寿仙

中里覚右衛門正明：直常御傳役御用人・靈松院様御傳御用人

岩手県立博物館 佐々木勝宏 作成（2011・10・29）

靈松院御機嫌伺 志和十右衛門	
若子様 御七夜 靈松院 修理と命名	
直常 33 回忌法要（暑氣自分大儀）	
※この法事の記録は巻八別帳作成	
岩野庄五郎毎年之通御靈屋御用	
中里覚右衛門 靈松院御用役辞職願	79
通信：台点が行かず大儀 覚右衛門のよ	
うには誰も勤められない今まで通り頼む	
靈松院様貸付金催促足軽江戸から来る	
正月御礼銭・羽子板代・破魔矢代など	
法靈社建立遷宮 靈松院名代覚右衛門	
正月から不調 細川桃庵治療にあたる	
靈松院死去（閏5月28日）	
川口源之丞忌中不参	
靈松院様貸付金支配 覚右衛門新帳仕	
立立会 宗忠左衛門と岩泉治部右衛門	
靈松院 49 日法要 香典詰花へ通信礼状	
覚右衛門 貸付帳新規作成眼病で辞退	80
御骨觀音林まで出迎 漆沢惣十郎	
舛形まで出迎 中里覚右衛門	
御骨奉守下向 志和十右衛門	
殿様ふと来迎寺へ浄生院へ焼香	
広信袴着 生母類（実相院）	